

畏友大河君を憶う

筑波大学名誉教授 亀淵 迪 (かめふち すずむ)

1.

君に初めて会ったのは戦争末期の1944年ですから、もう70年以上も昔のことになりますね。この年の春、私たちは金沢にあった旧制の「第四高等学校」（以下「四高」）に入学したのでした。「理科甲類」（以下「理甲」）は戦時中の政策で6組に増え、君は1組、私は5組でした。ご存じないかも知れませんが、入学早々から君は有名な存在でした：「金沢一中から来た大変な秀才が居るそうだ。その名は大河、ドイツ語の大河教授の息子らしい」との情報が流れていたのです。

大型の授業や軍事教練・勤労働員などは、理甲が組順に2分・3分して行われるのが常でしたので、君と出会うことは余りなかったように思います。しかし私たちの距離を縮める機会がやって来ました。2年生になった終戦の年の4月、私たち理甲の20名が金沢医大（現金沢大学医学部）に疎開していた理研仁科研の「宇宙線実験室」に勤労働員として派遣されることになったのです（因みに他の同級生たちは名古屋の近くの軍需工場に送られました）。

実験室のリーダーは四高の先輩の関戸弥太郎先生で、私たちの仕事は研究再開のためのお手伝いでした。煉瓦くらいの大きさの鉛運びはムスケル・アルバイト（力仕事）でシュメルツ（大変）でしたが、統計の初歩とか、真空管を使った簡単な回路作りなどを教わったりもしました。しかし何よりも、実際の物理の研究室とはどのようなものかを知り得たことは、私たちの将来にとって大きな意味を持つことになります。

4月から8月までの動員期間中、仁科先生が2度来沢されました。先生を囲んでの研究会の後は「薫風会」と称するお茶の会へと移行するのでした。「四高生理研入所式」の記念写真を撮ったのは、仁科先生の最初の来沢のとき（6月11日）だったかと思われます。写真では私たち2人が並んで立っていますね。因みに私が仁科先生を見掛けたのは、この2回が最初で最後となりました。

理研へは私たちの他に、一高・自由学園・東京女高師から派遣された人たちも居ました。昼休み時間には、皆でバレーボールをやって打ち興じたのも、なつかしい思い出です。君も私も大活躍でした。

しかし、この平穏も長くは続きませんでした。8月に入ると福井や富山が相次いで猛爆を受けます。次は金沢だろうということで、郊外の湯涌温泉へ再疎開することになります。私たちは温泉の近くの農家に分宿し、8月15日の午前も、炎天の下、荷車で引越し荷物を運んでいました。

2.

幸い金沢は結局爆撃を受けなかったもので、終戦後、2学期からは授業が再開され、ようやく高校生らしい生活が始まりました。君とは昼食時や放課後などに、いろいろと話し合うことが多くなりました。あるとき君が量子力学関係の本をもって来て、「水素原子の問題はこうやって解くんだ」と教えてくれました。もう

そんな先のことまで勉強しているのかと、驚きそして感心したのです。お互いに「大学は物理に行こうや」と話し合ったのもこの頃でしたね。

戦時中の特別措置で官立高校は2年で卒業ということになっていたのですが、2年生の2学期ともなれば、進学のこと考えなくてはなりません。しかし、とこうするうちに、高校は2年制から元の3年制に戻すということになり、私たちの卒業も1年延期されました。いささか拍子抜けの感もありましたが、それまでは勤労働員のため満足な授業もなかったもので、もう一年高校でしっかり勉強するのも悪くはないか、と思い直したことでした。

そんなある日の2人の会話：O「東大の物理へは四高から2名の枠があるようだ」、K「それならわれわれはジツヘル（确实）か」……。というのも、在学中の3年間にただ1度だけ、全校生徒の期末試験の結果が生徒控室に貼り出されたことがありました。それによると理科（あるいは理甲だったか）のトップが大河、2番は亀淵、……。となっていたからです。もっとも、それ以外の学期については、何も分かりませんでした。事態は、しかし、楽観を許しませんでした。大学入試はそれまでの書類選考から筆記試験に戻す、となったからです。

この決定に君などは、おそらく悠々適応だったろうと思いますが、私はいささか慌てました。また受験勉強かとうんざりしたこともあります。しかし救いが現れました。宇宙線実験室のリーダーだった関戸先生が、名大物理の教授に就任されたのです。もともと私は原子物理学の研究者になりたいと願っていたのですが、宇宙線実験も原子物理学の一部、それなら名古屋に行って実験家になるか、と思い始めたのです。関戸先生は小松市出身で、中学の先輩でもあるという気安さから相談したところ、「それなら名古屋にいらっしゃい」ということになり、実質的には名大物理へ‘裏口入学’する結果となりました。

君のほうは、勿論、予定どおり東大物理へと進み、宮本研究室に入って実験家となりました。しかし私とは言えば、名大では初志を貫徹せず、素粒子論研究室に入って理論家になってしまいました。こうして私たち2人の距離は、地理的にも学問的にも、いよいよ増大することとなります。ただし院生時代に1度だけ会ったことがあります—1953年9月18～23日、京大で行われた「国際理論物理学会議」の会場で。お互いに忙しく、短い言葉を交わすだけで別れました。

3.

しかし神は見捨てず、私たちの距離を再び縮める機会が与えられました—1960年夏のジュネーブで。この年君は‘拡大版新婚旅行’を兼ねてCERNに長期滞在中でした。他方私は、当時ロンドン大のImperial Collegeに居たのですが、夏休みはCERNで過ごそうとやって来たのです。ジュネーブには以前から親しくしていたWHOのA氏夫妻が滞在中であり、例によって居候としてA邸に転げ込んだのです。そして君たち‘O夫妻’とA夫妻が大変仲良しであることを知らされたのです。

いま私は、昔の日記を取り出して、私がジュネーブに着いた6月19日から、そこを去った8月16日までの1日、1日の出来事を反芻しています。その間マルセイユ大に行った2週間を除き、殆ど毎日のようにO氏やO夫妻のことが記

されているのです。お互い久しく会っていなかったのに、直ちに昔の‘四高言葉’で話し始めたようです。O、A 両夫妻は、ことあるごとに夕食をともにし、あるいは夕食後にどちらかの家に出掛けたりして、歓談を重ねていたようです—そこへ私も加わったという次第、もっとも独身の私は常に食客でしたが。

当時はコダカラーのフィルムで写真を撮り、それをスライドにして、プロジェクターで映し出して鑑賞するということが流行っていたのですが、O、A 両氏も私もこの趣味を共有していたのです。O 氏はスペイン旅行の、A 氏は北欧の、そして私はイギリスの写真などを見せ、それを皆でわいわい言いながらコメントし合うのでした。とくに O 氏が、レマン湖畔で日光浴中の水着姿の美女を望遠レンズで撮った作品は、実に迫力満点でした。わざわざその目的のために水泳パンツを買い求め、一緒に湖畔へ繰り出したこともありました。また A 夫妻をその友人のスイス人がエーデルワイスの沢山ある秘密の場所へ案内するというので私も同行し、そこでこっそり(?) 摘んで来たものの中から、一つまみを翌日 O 夫人に差し上げた、といった記事もあります。

CERN への往復には、よく君の車に乗せてもらいましたね。そうしたある日のこと、帰りの車が、A 邸ではなく、どうやら O 邸へと向かっているようなのです。「おい、おい」と問い質そうとすると君曰く：「今晚は俺の所で飯を食うんだ」「そういう事になっているんだ」と。実はその日 A 夫妻は一泊旅行に出掛けていて、夕食は自分で考えなくてはならなかったのです。そういう事情を予め察知しての O 夫妻の深謀遠慮だったのです。君の、どちらかと言えばぶっきらぼうな、そして断定的な2つの言葉が余程嬉しく有難かったと見え、そのまま上のようにカギ括弧付きで、日記に明記しております。

以上、遊びのことばかり記して来ましたが、ただ1日だけ、2人で真剣に勉強したことがありました。その日の記事を引きます。

July 14 晴のち雨

朝 O 車にて CERN へ。昼食は O 氏とキャンティーンで。話しがあるというので、食後一緒に私の研究室へ。「この式が解けないかね」と彼が示したのは非線形の微分方程式。2人で夕方まで議論したが、手に負えない大変な代物。そのまま O 車にて帰宅。間もなく O 夫人より tel「食事にいらっしゃいよ」と。再び外出 O 邸へ。ビフテキとビール、夜半まで駄弁る。

大河君、そして奥様、本当に楽しい夏を有難うございました。この機会に改めてお二人にお礼申し上げます。それにしてもお互い、若かったのですね。

4.

この夏の後、君と会ったのはただ1度だけ：1990年12月5～7日、「仁科芳雄博士生誕百年記念シンポジウム」(於駒込「日本医師会館」)でのこと。2人とも、四高時代に理研と関わりがあったということで招かれたのでしょう。君があるセッションで座長を務め、その前置きに、金沢での仁科先生との出会いについて述べたのでした。

数年前、久しぶりに手紙を出そうと思い立ち、君のアドレスを調べました。が、ぐずぐずしているうちに訃報に接してしまいました。互いに少しは時間的余裕のできた定年後には、せめて文通でも始められたらよかったのに、と後悔すること頻りです。この上は、ただ安らかに眠られよ。

終りに君の霊を慰めるべく、ゲーテの詩を手向けます—四高の大先輩の寸心・西田幾多郎の訳で。

見はるかす山々の頂 梢には風も動かず
鳥も鳴かず までしばしやがて汝も休はん

ではさようなら。いずれそのうちにまた——いざよいの月と語り君のこと。

(2015.10.10)



出席者所属別

金沢医科大学関係者 3 名

第四高等学校生徒 20 名

元第一高等学校生徒 鎌田甲一 1 名

自由学園女子部高等科生徒 立木伸子 他 1 名

第四高等学校関係者 4 名

理化学研究所職員 仁科芳雄 他 7 名

自由学園男子部高等科生徒 5 名

東京女子高等師範学校生徒 12 名

- 天海照子
- 近藤登美子
- 宮崎友喜雄
- 田村美和
- 川口千賀子
- 秦 さち
- 立木美枝子
- 関戸弥太郎
- 菅井節子
- 篠田寿満子
- 山田恵美子
- 森田悦子
- 遠藤啓子
- 鎌田甲一
- 石川太刀雄丸教授 (病理)
- (当時第一高等学校)
- (氏名不詳)
- 武田信子
- 飯田幸子
- 安部良三
- 井上剛教授 (法医)
- 篠遠喜規
- 梶浦正孝
- 武部洋子
- 吉田セキ子
- 増田時男
- 上野一晴教授 (生理)
- (氏名不詳)
- 桜木健民
- 長屋欣一
- 立木伸子
- 澤田尚一
- 米田 明
- 仁科芳雄
- 近藤一郎
- 筆者(当時自由学園)
- 菅沼信一
- (氏名不詳)
- (氏名不詳)
- 大河千弘
- 今城昭雄
- 石井忠純四高校長
- 伊澤省二
- 上野賢一
- 飯島 直
- 清水敏治
- 柴野拓美
- 大河良一先生
- 丹羽哲郎
- 小川芳雄?
- 酒井昭一
- 安藤孝行先生
- 早川典二郎
- 松田定次
- 秋山秀夫先生

(太字は理研関係者)